

ヨハネの
黙示録入門

足利学校

「七つの雷の語ったことを封印せよ。
それを書きとめるな」

三つのアイテム

古今東西、世界中にある書籍の中でヨハネの黙示録ほど解釈の分かれている本はないと思う。なにしろ黙示録の内容は、「その文字数の数だけ謎に満ちている」と欧米の研究者たちに言われているほどに難解なのだ。試しに冒頭部分を見てみよう。以下太字は聖書からの引用である。

イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐにも起こるべきことをその僕（しもべ）たちに示すためキリストに与え、そして、キリストが、御使いをつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである。（ヨハネの黙示録1章1節）

黙示には二つの意味がある。一つは神が神意・真理を人間にあらわし示すこと。そしてもうひとつの意味が暗黙のうちに考えを示すこと。で、問題なのはその次の聖句だ。神がキリストに与え、...そして、キリストが、御使いをつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである。と、回りくどい記述となっている。つまりその神意・真理の伝え方が、神→キリスト→御使い（天使）→ヨハネ→我々という伝言ゲームのようになっている。いや、黙示とは暗黙のうちに考えを伝えることだから、言葉ではなくジェスチャーで伝える伝言ゲームのほうがより近いといえるだろう。昔そんなテレビ番組を見ていたような気がする。初めのお題をジェスチャーで伝えてゆくのだが、いきなりお題が曲解され続けるのを楽しむ番組だったと思う。黙示録はジェスチャーによる伝言ゲームでお題を当てるように難解だということだ。

いや、いや、それどころではない。黙示録は現代社会に起こる大災害を数千年前に生きていた預言者が見て、それを彼の時代の言葉で再び我々現代人に伝えようとしているのだから、それは連想ゲームでお題を伝えようとしているようなものといえよう。たとえばだ。

江戸時代の農民が現代にタイムスリップして、夜中に田んぼのあぜ道を走るスーパーカブを見たとする。農民はスーパーカブのバイク音とヘッドライトに肝をつぶし、へたり込んで叫ぶかもしれない。「ご、御来光様じゃあー」とか言って。当然だ。彼がスーパーカブのバイク音とヘッドライトで「ホンダスーパーカブじゃあー」などと叫ぶわけがないからだ。江戸時代にはスーパーカブは存在しないので、農民は闇夜にヘッドライトを輝かせるスーパーカブから、お寺で見た百鬼夜行絵巻の最後に登場する御来光様を連想したのである。その後また江戸時代にもどった農民は村中に触れ回ることだろう。「わしゃ真夜中に御来光様をみたのじゃあ。その御来光様は妖怪だったのじゃあ。そ、それは将門さまの怨霊じゃったああ。わしゃ将門さまの怨霊をみたのじゃあああ」とか言って。ちなみに平将門の旗印は黒地に赤丸、百鬼夜行絵巻の最後を飾る御来光様と同じ絵柄です。

仮にその事件を伝え聞いた村の長老が文献に残し、我々に伝えたとする。昔々村人が、将門の怨霊を見て肝をつぶしてへたり込んだという一つ話だ。

はたしてその一つ話から、「その村人が見たという将門の怨霊とは、ホンダスーパーカブのことである。」と連想できる現代人がいるだろうか。

いるわけがない。

つまりは神から出されたお題を、連想ゲーム+ジェスチャー+伝言ゲームで伝えようとするの

がヨハネの黙示録であるといえる。いったいそんな遠回しの情報伝達手段で神の神意・真理がまともに伝わるのか。伝える気があるのかと言いたくなる。なぜもっと直接的に解りやすく神は神意・真理を伝えようとしないのか。そうできない理由でもあるのか。

あるのです。

実は、神の神意を曲解させなければならない理由があるのです。

なぜならヨハネの黙示録は、ピラミット型思考の覇権主義で世界に君臨しようとするローマカソリック及び、ローマカソリックから派生した「欧米文化」を罫にはめるために書かれた預言書なのだから。

「ヨハネの黙示録」は欧米文化を罫にはめ、滅亡させる目的で書かれた書物なのです。

罫はそこに罫が仕掛けられていることに気がつかれないように、巧妙に隠されている。臭いを消したり落ち葉で隠したりして。同じように欧米文化では黙示録の内容が理解できないようにと、黙示録は巧妙に組まれているのだ。理解できないどころか、わざと曲解されるように組まれている。誤解曲解され、悪用され続けるようにと意図的に仕組まれたのがヨハネの黙示録であると言えよう。人間を、永遠に地獄に落ちる者と、天国に挙げられ永遠の命を授かる者とに二分化する黙示録は、ある者を狂気に、ある者を暴力に狩りたてる。他者は改宗させるか、さもなくば殺すという狂気と暴力に踊らされた者はどこまでも残忍になりきれ。魔女狩りも、十字軍の遠征も、民族浄化による他国の乗っ取りや植民地化、アングロサクソンのアメリカ大陸強奪も、さらにいえば広島長崎への原爆投下に至るまで、すべて黙示録がバックボーンとなっているのだ。

たとえば魔女狩りを例にとってみよう。魔女審査官はこう考えた。「魔女がヨハネの黙示録に描かれているように永遠の責め苦に遭うのであれば、私が考えうるかぎりのどんな残酷な拷問も手緩い。魔女が地獄で味わう苦しみに比べたなら、我々の拷問なんぞは蚊に刺されたかゆみ程度もないことだろう。だが我々が魔女に対して地獄の責め苦の予行演習をしてあげるのは、魔女にとってはとても幸いなことなのだ。時間をかけ、少しでも多くの痛みを与えることこそ魔女に地獄での苦しさに慣れさせ、その苦痛を和らげることなのだから。私は心を鬼にして、魔女のために私の考えうるかぎりの苦痛を与えよう。それは魔女が陥る地獄の苦しみを少しでも和らげることになるのだから。なによりそれは私たちの罪を購（あがな）うために十字架に架けられた、イエス・キリスト様の愛に報いることなのだから…。ああああ、この魔女に地獄で心の平安を得させるため、今宵はどの拷問道具を用いようか…」と。

その数々の拷問道具には、神やイエスキリストへの賛美称賛の言葉が書き連ねてあったのですよ。信じられないことに魔女審査官は善意で魔女狩りを行っていたのです。彼らにとって魔女狩りによる報酬は二次的な目的であった。自分が神やイエスキリストの正義の立場に立つ、気高い戦士であるとの誇りのもとに凄惨な拷問を行っていたのだ。けれどももちろん本当の目的は金銭欲です。その目的は魔女狩りにより魔女一族の財産を根こそぎ奪うことにあった。なにしろ死刑執行の薪代を遺族に求めたくらいなのだから。そんな卑しい魔女審査官が利用したのが黙示録である。黙示録により自己正当化し、黙示録により己の良心を麻痺させ続けることができたのだ。

そんな魔女狩りの歴史から、仏教の地獄絵巻を連想する人もいることだろう。あの地獄の鬼どもが、地獄に落ちた亡者の舌をやっとここで引き抜いたりする絵巻だ。残酷な絵巻だがそこには庶民に悪い事をさせないための脅しの意味があった。悪人を善人に立ちかえらせようとの方便があったのだ。だがしかし、ヨハネの黙示録にはそんな意図などさらさらしない。なぜなら黙示録にはこう記述されているからだ。

「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なるものはさらに聖なることを行うままにさせよ」（黙示録 22 章 11 節）

なんと、悪人にはもっと悪い事をさせろと煽っているのだ。

つまり黙示録が回りくどく神の神意を伝えようとしている理由は、欧米文化に罪を犯させるための方便の一つなのだ。全く別の角度で言い換えるならば、日本人にしか理解できない「理外の理」によってのみ解き明かせるように組まれているのが黙示録ともいえる。特に古神道系の人なら、黙示録に描かれた「理外の理」が理解できる事だろう。

ヨハネの黙示録と日本人。何の接点もないように思われている。なにしろ遠く離れたヨーロッパ文化圏の中で生じた、はるか 2000 年も前のキリスト教の書物なのだから、日本人にその内容が理解できるわけがないと。

逆です。日本人にしか理解できないのがヨハネの黙示録なのです。

ただし、黙示録を解読するためには三つのアイテムが必要です。「将門の怨霊」を、「スーパーカブ」に変換するためには三つのアイテムが必要なのである。

一つ目は、黙示録の封印を解くための「キーワード」

二つ目は、黙示録を翻訳するための「辞書」

三つ目は、黙示録の背景を総括した「歴史書」

では早速、一つ目のアイテムである、黙示録の封印を解くための「キーワード」を手にしよう。

まずは聖書の全体像を確認しておきたい。

聖書は全 66 巻であり、それは前篇 39 巻と後編 27 巻からなっている。その前編（旧約聖書）はアブラハムから生じた 12 支族の物語なのだが、そこに主人公らしき個人はいない。いずれ主人公である救世主が登場するであろうことは匂わせているのだが、各巻を貫く主人公はいないのだ。

後編（新約聖書）に至ってようやく救世主であるイエスキリストが登場する。だが、待ちに待った主人公はすぐにあっさり死んでしまう。なので新約聖書 27 巻のうち、22 巻は主人公が死んだ後の弟子たちによるキリスト教会設立に至るまでの物語となっている。

さて、ではヨハネの黙示録は聖書全巻に対し、どのような立ち位置にあるのだろうか。

新約聖書において唯一預言の書であるヨハネの黙示録は、最終の 66 巻目である。つまりその預言は聖書を締めくくる完結編となっているのだが、ややこしいことに黙示録は下巻となっている。では上巻はなにかというと、それは旧約聖書の 26 巻目、黙示録と同様に預言書であるダ

ニエル書である。つまり黙示録はダニエル書の続きとなっている。

時は紀元前553年、ダニエルがチグリス川の岸に立っていたときのことである。

目をあげて望み見ると、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、ウパズの金の帯を腰に締めていた。そのからだは緑柱石のごとく、その顔は電光のごとく、その目は燃えるたいまつのごとく、その腕と足は、みがいた青銅のように輝き、その言葉の声は、群衆の声のようであった。（ダニエル書10章5節・6節）

ダニエルに現れた「ひとりの人」を一言でいえば、化けものである。

この幻を見た者は、われダニエルのみであって、わたしと共にいた人々は、この幻を見なかったが、彼らはおおいにおののいて、逃げかくれた。（ダニエル書10章七節）

単なる幻想ではない。ダニエルと共にいた人々はただならぬ雰囲気にもまれ、ぶるぶる震えて逃げて隠れたのだから。

一方、黙示録を書いたヨハネにも同様の化け物が現れている。

時は紀元70年後、ローマ帝国による第二神殿の破壊、ユダヤ人に対するホロコーストを真近に見たヨハネは、ローマへの復讐心で目をギラつかせていた。彼が見た地獄絵は、虐殺や惨殺という言葉では言いつくせない。子供にやさしいごく一般的な母親がローマ軍の兵糧攻めにより、「隣の母親とお互いの子供を交換して食べましょうと約束したのに、私の子供は食っておきながら、自分の子供は渡さない。約束がちがうう」と叫びながら広場を徘徊しているといった状況を目にしたのだ。その後ヨハネはローマの属州ユデアから戦争難民としてアジア西海岸沖のパトモス島に逃れた。

ふりむくと、七つの金の燭台（しょくだい）が目についた。それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真っ白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。...顔は強く照り輝く太陽のようであった。（黙示録1章12節～16節）

ダニエルとヨハネに現れた人の特徴が、上着を着て金の帯をしめている程度の共通点ならば偶然とも言えようが、両者に現れたのは同一の化け物である。

たとえば顔～その顔は電光のごとく（ダニエル）＝顔は強く照り輝く太陽のようであった（ヨハネ）。

たとえば目～その目は燃えるたいまつ（ダニエル）＝目は燃える炎（ヨハネ）。

脚～その腕と足は磨いた青銅のように輝き（ダニエル）＝その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり（ヨハネ）。

そして声～その言葉の声は、群衆の声のようであった（ダニエル）。＝声は大水のとどろきのようであった（ヨハネ）。

ただし、ダニエルに現れた化け物が白髪であったとは記述されていない。恐らくダニエルに現れてからヨハネに現れるまでに約600年のタイムラグがあるので、その間に歳をとって白髪

となったのであろう。

なぜその化け物はダニエルとヨハネの前に、600年もの時を隔てて現れたのだろうか。その後を追ってみるとわかる。ダニエルもヨハネもその化け物を見た後腰を抜かして気絶し、やがて両者共に化け物の右手で起こされて預言書を書くように告げられている。つまり化け物が両者に現れた目的は、ダニエルとヨハネとで一つの預言書を共作させることにあったのだ。

化け物化け物言ってたらそのうち罰が当たりそうなので、以後その化け物を「亜麻布を着た人」と言い換えることにする。

上巻であるダニエル書と下巻の黙示録には共通のタイトルがある。そのタイトル名は「真理の書」。

「まず真理の書にしるされていることを、あなたに告げよう」（ダニエル書10章2節）と、亜麻布を着た人がダニエルに告げているので、ダニエル書と黙示録は「真理の書」という原作に記されていることを上下巻に分けたものということができる。

つまりヨハネの黙示録は聖書全体の完結編であると共に、真理の書の完結編でもあるのだ。なのでヨハネの黙示録を聖書から外せないのだ。以下【 】内は、ジョナサン・カーシュ著、「聖なる妄想の歴史」から一部引用する。

【ヨハネの黙示録が歴史上に登場した時点で、すでに70種類の「黙示録」が存在した。中には「動物の黙示録」などという書物まである。古代から生き延びた多くの黙示録のうち、ユダヤ教とキリスト教の伝統で用いられる聖書の中に組み込まれるに至ったのはたった二つに過ぎない。ヘブライ聖書の「ダニエル書」と新約聖書の「ヨハネの黙示録」である。】

では、ダニエル書と黙示録とのつながりを見るためにダニエル書の最後を見てみよう。ダニエル書が完結してはいないことが解るからだ。

亜麻布を着た人がダニエルに言った。

「末の日に、あなたの民に臨まんとする事を、あなたに悟らせるためにきたのです。この幻は、なおきたるべき日にかかわるものです」。（ダニエル書10章14節）

亜麻布を着た人は、末日に「あなたの民」がどうなるかについて悟らせるために来たのだ。ちなみに、「あなたの民」とは、バビロンの王ネブカデネザルをもって「その国は永遠の国、その主権は世々に及ぶ」（ダニエル書4章3節）と言わしめた国、マナセ族が東の果てにたどりついて創った「日のいずる国」のことである。また「なおきたるべき日にかかわるもの」とは、ダニエル書（真理の書上巻）の預言を引き継いだ黙示録（真理の書下巻）のことである。つまり、末日にその意味が明らかにされる黙示録によって、日本の命運が解かれるとの意味となるのだ。

以下、ダニエル書最後の章である12章を5節から随時説明を加えて網羅（もうら）する。

そこで、われダニエルが見ていると、ほかに二人の者があって、ひとり川のかなたの岸に、一人は川のかなたの岸に立っていた。わたしは、かの亜麻布を着て川の水の上にいる人にむかっていった、「この異常なできごとは、いつになって終わるのでしょうか」と。

チグリス川を挟んでこっち側の岸に一人、あっち側の岸に一人立っている。こっち側はダニエルも立っているダニエル書であり、あっち側はヨハネが立っている黙示録を表わしている。そしてチグリス川はその接点を象徴している。川の上に立つ亜麻布を着た人に対する質問である、「この異常なできごと」は、「ダニエル書に預言されたこの異常な人類史」と言い換えた方がよいだろう。ダニエル書の11章は血なまぐさい人類の権力闘争について、延々と預言されているからだ。したがって12章では川の上に立つ亜麻布を着た人に対して、「ダニエル書に預言されているこの血なまぐさい人類史の預言は、一体いつまで続くのか」との質問が発せられたのである。

かの亜麻布を着て、川の上にいる人が、天に向かって、その右の手と左の手をあげ、永遠に生きる者をさして誓い、それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民を打ち砕く力が消える時に、これらの事はみな成就するだろうと言うのを、わたしは聞いた。

その右の手と左の手で示されているのは、「真理の書」原本から上下巻に分かれた巻物、ダニエル書と黙示録とを表わしている。したがって、天に向かって両手をあげたことは真理の書上巻（ダニエル書）から、真理の書下巻（ヨハネの黙示録）に預言が移されることを意味している。そのダニエル書と黙示録に描かれている預言は、聖なる民を打ち砕く力が消える時まで終わらないのだ。

イメージとしては川の上にいる亜麻布を着た人が、手元にあった「真理の書下巻」を、両手をあげてポンと対岸の人に放り投げたと思えばよい。当然対岸の人は真理の書下巻を受け取る事となる。ヨハネの黙示録10章5節6節8節を要約すると、海と地の上に立っている御使いが天にむけて右手をあげて、世々限りなく生きている方をさして誓っている姿が描写されている。ヨハネが幻で見た海とは、実はダニエルが実際に対岸にいたチグリス川であり、ヨハネの側に立っている御使いはその右足を川に、左足をヨハネ側の地につけていたと考えていただきたい。なぜダニエル書の亜麻布を着た人が両手をあげているのに対し、ヨハネの黙示録の人は右手だけを挙げて神に誓っているのだろうか。それは左手に受け取った巻物を持っているからである。その巻物とは当然、亜麻布を着た人からポンと放り投げられた真理の書下巻のことである。

この異常なダニエル書から引き継がれた黙示録の預言が始まる「ひと時とふた時と半時」とはどのような意味なのだろうか。

「ひと時」とは時の区分であって、この個所の場合は一年を表わす場合と一日を表わす場合がある。したがって、ひと時+ふた時+半時とは、一年+二年+半年=三年半とも読めるし、一日+二日+半日=三日半と読み取ることもできる。「ひと時とふた時と半時」という預言は、なにかの年月日に三年半、もしくは三日半を加えてはじめて意味をなす。すなわち、なにかの年月日に三年半を加えた時に異変の本命が起こり、三年半の代わりに三日半を加えた場合は、その異変の前兆が示されると考えることができる。ここ、重要なので記憶してください。

川の上にいる亜麻布を着た人は、黙示録のある接点に立っている。したがって亜麻布を着た人が立っているその位置は、こっちの岸（ダニエル書の終わり）から三年半もしくは三日半経った

位置である。つまりその「ある接点」とは、「聖なる民を打ち砕く力が消える時」を示している。つまり、「ダニエル書に預言されているこの血なまぐさい人類史の預言は、一体いつまで続くのか」という質問に対する答えは、「聖なる民を打ち砕く力が消える時」を預言する黙示録が始まるまで終わらないという事である。くどいようだがその黙示録の預言は、「聖なる民を打ち砕く力が消える時」を告げる目的で書かれ、「聖なる民を打ち砕く力が消える時」が現実として来るまで終わらないのだ。

すなわち、ヨハネの黙示録が示す異変の本命は「聖なる民を打ち砕く力が消える時」なのである。

わたしはこれを聞いたのだけれども悟れなかった。わたしはいった、「わが主よ、これらの事の結末はどんなでしょうか」。彼は言った、「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。この言葉は終わりの時まで秘し、かつ封じておられます。多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練（ね）られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう。

ダニエルは下巻である黙示録を読んでいないのだから、悟れるわけがない。なにしろダニエル書は紀元前500年以上前に書かれているのに対し、黙示録は紀元後に書かれているのだ。約600年の開きがあるのだからダニエルが黙示録を目にするわけがない。

私が上記の通釈を書けるのは、上巻であるダニエル書と下巻である黙示録を通読し、終わりの時である現代にてその封印を解いたからなのであり、上巻しか知らないダニエルが悟れるわけがない。つまりダニエルが「わが主よ、これらの事の結末はどんなでしょうか」と言っているという事は、ダニエル書の最後に「つづく」の文字が書き込まれているのと同じ事だといえる。で、「悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう。」ということは、あなたの知能指数がどんなに高かろうと、高学歴で、世間がうらやむ肩書き（東大名誉教授的な）が付いていようと、あなたが「悪い者」であるならば、黙示録を理解することができないのだ。「悪い者」はひとりも悟ることができないとはそういう意味です。けれどあなたが「賢い人」ならば、私の黙示録解説の意味を理解することができるはず。いや、できます。

重要なのは、「この言葉は終わりの時まで秘し、かつ封じておられます。」との聖句である。黙示録は封印されている。その言葉が意味するのは、「終わりの時」が来るまで黙示録に書かれている真の意味が誰にも解らないということだ。逆を言えば、「終わりの時」に黙示録の封印を解くキーワードが見つかるということである。では、どこにそのキーワードが隠されているのか。

下記の聖句です。

黙示録を解くためのキーワードは下記の聖句に隠されています。

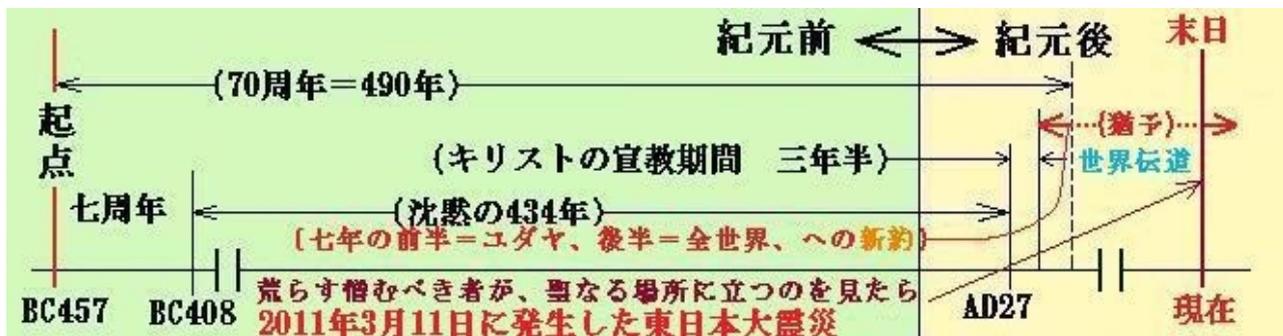
常供（じょうく）の燔祭（はんさい）が取り除かれ、荒らす憎むべきものが立てられる時から、千二百九十日が定められている。待っていて千三百三十五日に至る者はさいわいです。しかし、終わりまであなたの道を行きなさい。あなたは休みに入り、定められた日の終わりに立って、あ

なたの分を受けるでしょう」。

上記の聖句を最後にダニエル書は終わるのだが、あなたは恐らく上記の聖句が何を意味しているのかよく解らないことだと思う。けれど話の流れから、上記の聖句はダニエル書と黙示録のある接点を特定するための預言だと推測することができるはずだ。「ひと時とふた時と半時」と、1290日および1335日はなにか関連しているはずだと。

黙示録が下巻なら、上巻を読んでその意味を悟らなければ下巻である黙示録に書かれている意味は解らない。あたりまえの話だが、ふつう上巻を読んでから下巻を読むものだから。

下の図と、【 】で括った文章は、私が2013年8月14日に電子出版パブー上で無料公開した「旧約聖書に預言されていた日本の使命 補講版」という題名のダニエル書の解説本から一部抜粋した部分である。公開した日から一切手を加えていません。読んでみてください。



【ここに至ってようやく上図の「70週の預言」に末日の具体的な年月日を記入することができました。末日は2011年3月11日に、すでに始まっていたのです。けれど「70週の預言」はこれで終わったわけではありません。さらに預言は続きます。そしてなにより「末日」はヨハネの黙示録に描かれた世紀末へとつながっているのです。黙示録の冒頭を記述します。

イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐにも起こるべきことをその僕たちに示すためキリストに与え、そして、キリストが、御使いをつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである。(ヨハネの黙示録1:1)

黙示録には人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったような大地震をはじめとする天変地異が、これでもか、これでもかとばかりに波状攻撃で襲いかかってくるのが預言されています。注目すべきはそんな大災害が「すぐにでも起こる」と記述されていることです。けれど黙示録が書かれてから2000年近く経ちましたが、そんな大災害は起こってません。預言は外れたのでしょうか。

いいえ、「70週の預言」からすると、黙示録の時代に入ったのは末日である2011年3月11日なのです。イエスの言葉を思い出してください。福音が世界の隅々まで伝道された後に大艱難がやって来ると預言していました。つまり、もうすぐ起こるのです。今は嵐の前の静けさではありません。では、嵐の前の静けさはいつまで続くのでしょうか。

三年半です。

なぜなら黙示録に「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない」(ヨハネの黙示録7:3)と記述されているからです。

印を押すとは新しい契約のことで、上図の（七年の前半＝ユダヤ、後半＝全世界、への新約）のうち、後半の三年半が該当するからです。つまり2011年3月11日の三年半後である、2014年9月8日までは「地と海と木」が損なわれることはないのです。たとえ放射能で汚染されることはあっても。

すみません。ここで力つきました。

黙示録が不確定要素となり、2014年9月8日以降のダニエル書を読み解くのが困難になったからです。なにしろ黙示録を読み解くためには黙示録の預言を時系列に並べ直し、第四エズラ書を含むダニエル書以外の預言書とも整合性を取らなくてはならないという、気の遠くなるような作業が不可欠だからです。

ただし断片的ではありますが、「三号機の爆発」を起点として今後のターニングポイントとなる日を二つ特定することができます。

「常供の燔祭が取り除かれ、荒らす憎むべき者が立てられる時から、千二百九十日が定められている。待っていて千三百三十五日に至る者はさいわいです。」（ダニエル12：11、12）

三号機が爆発したのが2011年3月14日（月）ですから、その1290日後は2014年9月24日（水）です。そして爆発から1335日後は2014年11月8日（土）となります。つまりその間、45日を耐え忍ぶことができたならば、希望の光が見えてくるということです。】

以上、2013年8月14日時点での私の聖書解釈では、末日が2011年3月11日（東日本大震災の日）から始まっている。その解釈は一年半以上経った今でも変わりはない。

重要なのは、福島原発三号機の爆発を起点として、キーワードは2014年9月24日（水）から始まり、2014年11月8日（土）にピリオドが打たれるまでの間にあるということだ。

ちなみに2014年9月24日（水）はユダヤ人にとって特別な日である。なぜならユダヤ暦では2014年9月24日日没後、星が三つ見えた時から新年が始まるのだから。なにより21世紀の現在でもイスラエルの正月はユダヤ暦に従っていて、今現在でもユダヤ暦は生きているということだ。つまり2014年9月24日はユダヤ暦の始まりのターニングポイントであり、2014年11月8日は何かの終わり、ピリオドであるということだ。その間にあるはずのキーワードが解ればヨハネの黙示録を解くことができる。

始まりのターニングポイントはユダヤ暦の新年である。我々とユダヤ暦には何のかかわりもないと思われるかもしれないが、そもそも週に一度休みがあるのはユダヤ暦の安息日に即しているわけだし、もし身近にカレンダーがあるなら確かめてみてほしい。一週間は月曜日から始まるはずなのに、カレンダーの一番左はなぜか日曜日となっているカレンダーがあるはずだ。それはユダヤ暦にとって土曜日が安息日になっているので、日曜日から一週間が始まるせいである。聖書からすると本来土曜日が休みなのにいつの間にか日曜日に変えられてしまった。それはローマカソリックのせいなのである。ともあれ、後にこのユダヤ暦が重要な意味を持って私たちに迫ってきます。

さて、二つのターニングポイントを一点に集中させ、キーワードを導き出すためにはどうしたらよいのだろうか。その一点とは、ダニエル書から黙示録に切り替わる「ある接点」だということだ。ダニエルが見た幻を思い出してください。川のこっち側とあっち側に一人ずつ人が立っていて、手前的人是ダニエル書を表わす1290日（2014年9月24日）で、向こう岸の人は黙示録の預言の終わりを象徴する1335日（2014年11月8日）でしたね。で、川の中央に立っている人は「ひと時とふた時と半時である」との預言でダニエル書と黙示録の「ある接点」を告げてました。

さらに思い出してください。「ひと時とふた時と半時」という預言は、なにかの年月日に三年半、もしくは三日半を加えてはじめて意味をなすのでしたね。すなわち、なにがしかの年月日

に三年半を加えた時に異変の本命が起こり、三年半の代わりに三日半を加えた場合は、その異変の前兆が示されるのでしたね。

では、ターニングポイントの始まりでありユダヤ暦の新年でもある2014年9月24日に三日半を加えてみよう。

2014年9月27日正午となる。その日、その時がキーワードとなっているはずだ。その日は「聖なる民を打ち砕く力が消える時」の前兆があるはずの日でもある。そしてそのキーワードによって黙示録の封印を解き放つことができるのだ。いったいその日その時に何が起こったのか...

御嶽山の噴火である。

2014年9月27日11時52分過ぎに御嶽山は噴火し、死者57名、行方不明者6名の犠牲者を出した。

今回の噴火に遭われて犠牲になってしまった方々へ心よりご冥福をお祈りします。

御嶽山は1979年、有史以来初めて噴火したのだが犠牲者を出してはいない。1991年の噴火でも、2007年の噴火でも犠牲者はゼロである。なぜ2014年に至って未曾有の大災害となったのか。

その日は夏の天候不順が嘘のような晴天の土曜日。紅葉シーズン真っ盛りの昼食時であった。とても平和な絶好の登山日和であったことが災いしたのだ。御嶽山頂上には100人を超える登山者がいたらしい。

では火山噴火予知連絡会が昨年(2014年)、一日だけ行った現地調査の報告書を見てみよう。

《東京大学地震研究所，産業技術総合研究所，山梨県富士山科学研究所，信州大学，帝京平成大学，常葉大学

1 御嶽山

御嶽山山頂調査の速報

概要

2014年11月8日に山頂調査を実施し、9月27日噴出物や噴石の堆積状況について調べた。山頂部での噴出物の厚さは最大35cmであった。山頂付近の狭い地域に火砕流堆積物と考えられる堆積物を確認した。噴石は数十cm大のものが多数あり、30~20cm大の噴石は火口から北方向に1.3kmまで到達していた。調査中は、火口からは白色噴煙が勢い良く放出されていたが、火山ガス臭はきつくなくカラスが山頂付近を飛んでいるなど、低調な噴煙状態であった。地元の山岳ガイドな地どころからの聞き取り調査では、噴気の増大や異常な火山ガス臭などの噴火前の異常は認められなかった。》

以上の報告書概要から、黙示録に関連する重要なターニングポイントの一つあげることができる。

調査時、カラスが山頂付近を飛んでいる等低調な噴煙状態であったということ。逆を言えば低調な噴煙状態であったからこそ学術的な山頂調査を行う事ができたということである。それまで噴火の小康状態を縫って遭難救助隊だけが山頂調査を行う事ができた。けれど2014年11月8日に学術的な山頂調査を行えたということは、その日が御嶽山噴火に一つのピリオドが打たれた日ということができる。そしてその日は終わりのターニングポイントである2014年11月8日と一致する。

ただし、ここで絶対間違っはいけないことがある。御嶽山の噴火はダニエル書の預言の成就

ではないということだ。なぜならダニエルが見た幻には御嶽山の噴火を連想させる記述などないからだ。ここで重要なのは、御嶽山の噴火によって「ヨハネの黙示録」の封印が解かれたということなのだ。

旧約聖書のアモス書を読み直そう。

まことに主なる神は

そのしもべである預言者にその隠れた事を

示さないでは、何事をもなされない。

(アモス書3章7節)

つまり2014年9月27日正午の御嶽山噴火は、預言者ダニエルとヨハネに示された「隠れた事」の封印が解かれたことに意味がある。別の言い方をすれば、「隠れた事」を解き明かすためのキーワードが御嶽山噴火の日時に示されているということなのだ。したがって、ここから黙示録を読み解くためのキーワードを特定する作業に移る。

では2014年9月27日正午という時が示す意味を一つ一つ読み解いていこう。

まず、正午であったという事。

昼食時である。朝食や夕食は各自ばらばらの時間にとるが、昼食は正午と決まっている。言うまでもない事だが、昼食時は仕事の手を休め、安息する時である。

そして27日であったという事。

その日は土曜日である。十戒で定められた安息日は七日に一度めぐってくる土曜日であり、今でも敬虔なユダヤ教徒は土曜日を安息日として仕事をしない。

さらに9月であるということ。

2014年の9月はユダヤ暦で新年を迎える安息月なのである。ここまでで安息時の安息日の安息月ときた。では2014年は安息年なのか。

そう安息年なのだ。安息年は旧約聖書のレビ記等で定められていて七年に一度めぐってくる。その年には畑の作付をやめて土地を休ませ、負債を免除するよう定められた年である。

アメリカでベストセラーになった「ミステリー・オブ・シュミータ」という本がある。ユダヤ教のラビ（先生）であるジョナサン・カーンの書いた本である。7年に一度めぐってくる安息年（シュミータ）と世界の経済不況が奇妙にリンクしていることをこれでもかとかばかりに列挙している内容の本であり、彼によれば秒単位で安息年と経済不況とがリンクしている場合さえあるという。安息年（シュミータ）については私が説明するよりもジョナサン・カーン氏の説明のほうが解りやすいので、YouTubeでの彼の説明をそのまま引用する。司会者の「シュミータとは何ですか」との質問に対する彼の答えである。

《3千年前から伝わる謎で、シナイ山にいるモーセの時代から9月11日の事件や、経済の浮き沈み、為替市場の暴落や国の浮き沈みにも影響を与えるものです。第一次と第二次大戦や、現在起こっていることやこれから起こることまで驚くほど正確に示されている聖書の謎なのです。

シュミータとはヘブル語で『解放』または『崩壊』や『揺るがし』を意味します。シナイ山で神はイスラエルの民に律法を与え、7年ごとに安息年をもうけることを教えました。その間種まきや収穫もしてはならず『エルル29』と言われてるシュミータの最終日にはすべての借金や国の負債がすべて帳消しになったのです。

それは祝福ですがイスラエルが神に逆らい始めたとき、シュミータが神に背を向ける国への裁きのしるしとして現れたのです。紀元前586年にエルサレムが陥落したのはシュミータを何回も無視した結果だと聖書にあります。》

つまり、2014年9月27日正午という時は、安息時の安息日の安息月の安息年なのだ。そして、安息時の安息日の安息月の安息年が指し示すのは、安息年を七回繰り返した後、つまり4

9年に一度めぐってくるヨベルの年なのである。

ヨベルの年についてはレビ記25章8～16節に記述されている。要約すると、7年に一回の安息年が7回で49年、そしてその翌年が50年で、ヨベルの年となっている。この年は、通常の安息年で行われる「耕地を休ませる」、「奴隷を解放させる」に加え「自分の所有地に帰ることができる」、つまり、生活が困窮して売り払ってしまった土地を取り戻し、その土地に帰ることができるというものだ。この制度は貧富の差を50年に一度チャラにすることによってイスラエルの民とそこに住む人々の富の再分配をし、富が少数に集中しないようにするための制度であった。

ただし、ヨベルの年の規定が守られたことは一度もなかったのではないのかと言われている。しかもヨベルの年がいつなのかも現在では分からなくなっている。隠されているのだ。けれどダニエル書の70週の預言からヨベルの年が2015年だと解る。

70周とは70周年を意味していて、 $7 \times 7 \times 10$ 年、つまり $7 \times 7 =$ ヨベルの年が10回繰り返されているのだから、ダニエル書の預言の終わり(2014年9月8日)を引き継いだ2014年9月24日のユダヤ暦新年の翌年がヨベルの年となる。したがって2015年がヨベルの年となるのだ。ジョナサン・カーン氏もイスラエルの歴史から追った別の視点から2015～2016年がヨベルの年だといっているのだが、ここまでくると、さらにその先はないのかと調べたくなってくる。つまり2014年9月27日正午が指し示す、安息時の安息日の安息月の安息年のヨベルの年の先にまだ何かがあるのではないのかという疑問だ。で、調べてみた。つまり、2015年のヨベルの年は祝うべき義務が生じてから何回目なのかについて...

70回目なのである。

まず、ヨベルの年を祝うべき義務が生じた年代を知るには、モーセの「出エジプト」が何時だったのかを確定しなければならない。だがその答えは封印されている。エジプト側の資料にも、聖書側の資料にもヨベルの年をピンポイントで特定できる記述はないからだ。エジプト側からしてみれば大勢の奴隷に逃げられたうえに追いかけた軍隊が全滅しているのだから、そんな後世の恥となる歴史が刻まれるわけがない。なので聖書の記述から特定するしかない。けれど聖書から安息年の始まりを特定できる記述がない。一言、出エジプトした時のエジプトの王の名を記述したらいいだけなのに。ようするに「封印」されているわけだ。それでも無理やり特定しようとすると、ペルシャ王キュロスがバビロンを倒したBC539年を起点として、ユダの70年の荒廃やイスラエルの王たちの在位期間を計算に入れて推測するしかない。それは紀元前13世紀から15世紀半ばであろうと推察されている。仮に15世紀半ば説で計算してみよう。出エジプト後40年間、モーセに引きつられた十二支族は砂漠をさまよったのだから、カナンのに地に定着したのは紀元前15世紀初め頃となる。レビ記を見てみよう、レビ記25章1～4節、安息年の規定がいつから始まるのかが記述されているからだ。

主はシナイ山で、モーセに言われた、「イスラエルの人々に言いなさい、『わたしが与える地に、あなたがたがいったときは、その地にも、主に向かって安息を守らせなければならない。六年の間あなたは畑に種をまき、また、六年の間ぶどう畑の枝を刈り込み、その実を集めることができる。しかし、七年目には、地に全き休みの安息を与えなければならない。これは、主に向かって守る安息である。』

安息年を祝うべき最初の義務が生じたのが、神が与えると約束した地であるカナンにはいった時である。その年を2015年のヨベルの年から逆算するとBC1415年となる。演算してみよう。つまり、安息年を最初に祝った年BC1415年からAD2015年のヨベルの年までの経過年数は $1415 + (2015 - 1) + 1 = 3430$ 年。～なぜ2015から1を引くかと言えば、2014年の安息年の翌年がヨベルの年だからであり、なぜ1を足すのかといえば西暦0年が存在しないためである。さらに、 $3430 \div 49$ (ヨベルの年 7×7) = 70 (2015年9月14日がヨベルを祝うべき70回目)となるのだ。今後、70回目のヨベルの年を、「ヨベル

70」と名づける。

結論を言うと、御嶽山噴火日時が指し示している「隠れたこと」とは、安息時の安息日の安息月の安息年のヨベルの年の先にある「ヨベル70」である。

一つ目のアイテム、黙示録を解くための「キーワード」が手に入った。それは「ヨベル70」である。

で、ここに至って「ヨベル70」が持つ意味に慄然とした。

私が「旧約聖書に預言されていた日本の使命」（以下本編と略称）というイザヤ書の預言解説書を公開したのが平成22年末。内容は日本の終戦AD1945年を起点として70年後、2015年9月3日から起こる日本の命運である。

その後平成25年夏に「旧約聖書に預言されていた日本の使命 補講版」（以下補講版と略称）というダニエル書の預言解説書を公開した。内容は神殿再築のBC457年を起点として70週の預言が終わる2014年9月8日まで。

そして「ヨハネの黙示録入門」ではBC1415年を起点として70回目のヨベルの年、2015年9月14日が浮かび上がってきた。

つまり「本編」はAD1945年（安息年）を起点として7×10年で、2015年9月3日。

「補講版」はBC457年（安息年）からの70週の預言=7×7×10年で、2014年9月8日まで。（途中に執行猶予期間を含む）

「ヨハネの黙示録入門」はBC1415年（最初の安息年）を起点として7×7×7×10年で、2015年9月14日。

ただし「本編」の預言は終戦後70年経った後の預言なので、2016年以降と考えることもできる（本編参照のこと）。またダニエル書の70週の預言はヨハネの黙示録に引き継がれている。そして引き継がれたヨハネの黙示録が指し示している70回目のヨベルの年は、その始まりの日（2015年9月13日日没）よりも、その終わりの日（2016年10月2日日没）が重要なのだ。ジョナサン・カーン氏によると、不況が訪れるのは安息年の始まりの日ではなく、安息年の終わりの日である「エルルの29日」だと語っているからだ。

イザヤ書、ダニエル書、ヨハネの黙示録、それぞれの預言が2016年に集約された。いったい何が起こるのだろうか。7年に一度の安息年で世界史は不況を迎えるというならば、7×10年と、7×7×10年と、7×7×7×10年の預言が指し示す2016年には何が起こると言うのか。

私は「ヨベル70」は7年間続くと考えている。つまり2022年まで続くのだ。2022年の77年前は1945年、大日本帝国崩壊の年である。さらにその77年前は大江戸幕府の崩壊した年。つまりホップ・ステップ・ジャンプで2022年を迎える事となる。

だがまだ結論を出すには早すぎる。2014年9月27日正午が指し示すのが、安息時の安息日の安息月の安息年なのは間違いないが、その先のヨベルの年は推測でしかない。ましてさらにその先にあるヨベル70は、ヨベルの年が70回となるように都合良く逆算したにすぎないのであるから、推測ですらない。本当に御嶽山の噴火が指し示すのが「ヨベル70」なのであるならば、何らかの印があるはずである。

もう一度、御嶽山が噴火した2014年9月27日午前11時52分過ぎという時間が持つ意味を精査する。

・噴火したのが午前11時52分過ぎということは、【7分後】が安息時の正午である。

・噴火した2014年9月27日の【7日後】がユダヤ暦で最も厳粛な日、一年に一度だけ訪れる大贖罪日（ヨム・キプール）2014年10月4日（土）である。大贖罪日とは新年から10日目の日であり、ユダヤ暦では一年で最も厳粛な安息日と考えられている。この日は日没から日没まで25時間の断食、絶飲絶食、化粧品や洗面も禁止となり、テレビやラジオをはじめ、交通機関や娯楽施設などイスラエル国内のほとんどの社会活動は休止する。普段ユダヤ暦を守らない

ユダヤ人でも、この日だけはシナゴーク（ユダヤ教の教会）に行ったり、断食をしたりして、家で静かに一年を悔い改める日なのだ。

・2014年9月はユダヤ暦の新年ではあるが、日本で言うところの正月ではない。ユダヤ暦の正月は【7ヶ月後】である2014年4月4日～11日である。その7日間にはユダヤ暦で最大の祭りである除酵祭（過ぎ越しの祭り）があるのだ。突然除酵祭なんぞと言われても、そんな自分と関係ないなどと思わないでいただきたい。あなたは日本の最大のイベントである「正月」として、「除酵祭」を知らずのうちに祝っているのだから。以下、除酵祭と日本の正月の類似点を列挙する。

- 1) 除酵祭はユダヤ教でいう新年の祭り。日本の正月にあたる。
- 2) 除酵祭は7日間続く。正月も7日正月である。
- 3) 除酵祭の間、ユダヤ人は酵母菌の入っていないパンを食べる。日本も正月の間、餅（酵母菌の入っていないパン）を食べる。
- 4) そもそも除酵祭を行うためのパンを作るには、酵母菌がパンに付着しないように大晦日に徹底的に掃除して、酵母菌を家から排除しなければならない。日本で正月前に大掃除する風習は除酵祭からきている。
- 5) 除酵祭では酵母菌の入っていないパンを祭壇の両脇に重ねて供える。日本の鏡餅ですな。
- 6) 除酵祭では日本の年越しと同じように、家族で寝ないで夜を明かす。

その他門松やしめ縄、赤い鳥居なども除酵祭と関連していて、聖書には除酵祭の風習の持つ意味がそれぞれ記述されているのだが、ここまでとする。にしても日本人って、3500年前に定められた聖書の律法を風習として、何一つ意味も解らずに現在まで守ってきたのですね。感心するのを通り越してあきれてしまいます。

話は脱線したが、除酵祭は自動的に七週の祭り（シャブオット）に繋がる。2014年4月4日から始まる除酵祭の二日目から数えて7週と一日目（50日目）が2015年5月24日であり、その日はユダヤ暦の三大祭りのひとつである七週の祭りなのだ。つまりここにヨベルの年（7年×7年+1年=50年）のミニチュア版（7日×7日+1日=50日）がある。御嶽山の噴火が「ヨベル70」を指し示すのであれば、ヨベルの年のミニチュア版である2015年5月24日になんらかの印があるはずである。

ここまでをまとめてみよう。

- ・2014年9月27日午前11時52分過ぎの噴火は、本番（正午）の七分前。
- ・2014年9月27日の安息日（土曜日）は本番（一年で最大の安息日である大贖罪日）の七日前。
- ・2014年9月の安息月（新年）は本番（正月）の七ヶ月前。

で、その安息月は自動的に七週の祭り、2015年5月24日を指し示し、そして「ヨベル70」が2015年9月13日日没から始まるのならば、2015年5月24日に「ヨベル70」を告げる印があるはずなのである。

私としては2015年5月24日に印があろうと無かろうとヨベル70が2015年9月13日日没から始まると確信しているのだが、ひとつ疑問がある。それは黙示録10章1節～4節に記述されている内容だ。

わたしは、もう一人の強い御使いが、雲に包まれて、天から降りてくるのを見た。その頭に、にじをいただき、その顔は太陽のようで、その足は火の柱のようであった。彼は、開かれた小さな巻物を手に持っていた。そして、右足を海の上に、左足を地の上に踏みおろして、ししがほえるように大声で叫んだ。彼が叫ぶと、七つの雷がおのおのその声を発した。七つの雷が声を発した時、わたしはそれを書きとめようとした。すると、天から声があつて、「七つの雷の語ったことを封印せよ。それを書きとめるな」と言うのを聞いた。

つまり黙示録の内容を全て明らかにしてはいけない、「封印せよ。それを書きとめるな」ということである。ならば、その封印を勝手に私が公開してよいものだろうかという疑問だ。

とある推理小説で例えてみよう。推理小説の真犯人はほとんど終わりのページで明らかにされる。その真犯人をインターネット上で誰かが公開したならば、作者は怒って訴えることだろう。当然だ。同様に私なんかは聖書の「オチ」をばらしちゃって良いものだろうかという疑問だ。なにしろ黙示録には呪いの言葉が記述されている。

この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。(黙示録22章18節)

つまり、終わりの時まで秘されていることを勝手に書き加えるならば呪っちゃうぞ、という事ではないのだろうか。一方、「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。」(黙示録22章10節)とも記述されている。どっちなんだ。

で、私としては2015年5月24日に「ヨベル70」の印があれば、それは早く封印を解いて公開しろということなので続編を書くけれど、その日に何もなければ黙示録から手を引きます。内容がやばいのです。その場合この本にヒントを三つだけ書いとくので、気になる方は自分で推理してください。

とりあえず一つ目のアイテム、「ヨベル70」という「キーワード」が手に入ったのだから二つ目のアイテムである黙示録を翻訳するための「辞書」を手に入れよう。

実はダニエル書とヨハネの黙示録を御嶽山の噴火によって結び付けることができたのは、末日と東日本大震災を結び付けた小説、「天井裏のイエスキリスト」があったからである。

私が本編の付録として、小説「天井裏のイエスキリスト」をパブー上で無料公開したのが2011年3月11日AM11時39分03秒。東日本大震災の約3時間前である。最終ページの最終更新日時を確認して頂きたい。

その内容を一部抜粋する。

【 「じじいはすっ込んでろ、俺はイエスとやらの聞いているんだ」ヨッパはパウロを怒鳴りつけた後、イエスに真剣な目を向けて再び尋ねた。

「お前さんには未来が見えているらしい。だったらこの世が何のために定められ、なぜ定められた人生を送るのか、あんたその答えを知ってんだろう」

「その答えは奥義に拘わる。口外無用との条件でなければ話すことはできない」

「ほう、奥義だと。なぜ奥義にしなければならんのだ」

「その答えが明らかにされるのは、二つの場合だけだ。一つは死の直後、個人的に与えられる場合。そしてもう一つの場合が、末日の直前」

「死の直後というのは分かった。だが、その『末日の直前』とは何時のことだ」

「私が生まれてから2011年経ったとされる年、マナセの部族が創った『日のいずる国』で明らかにされる」

「どうやって奥義がバラされるんだ」

「『旧約聖書が預言していた日本の使命』という論文の、付録小説の中で明かされる」

「それまでは口外無用ということか。分かった。俺は誰にも言わねえ。貴様らも誰にも言わねえな」

パウロとマナセはコクリとうなずいた。

「では話そう」とイエスはコソコソ声で言うと、三人を手招きした。四人は膝を抱え、小さな円陣を組んだ。】

そして小説を公開した3時間後に東日本大震災が発生したのだ。

私は預言した覚えはない。したがって預言が成就したなどと思ったこともない。私は日本に対する聖書の預言を翻訳している者にしかすぎないからだ。ただ言える事は、2011年3月11日の東日本大震災によって「末日」となったと知らされたのである。

では末日が来る前と後とでなにか大きく変わったことがあったのだろうか。

おおありである。

キリスト教会すべてが無効となったのだ。なぜならキリスト教会は全世界に福音を伝えるという目的で設立されたのだから。詳しくは「天井裏のイエスキリスト」及び「旧約聖書に預言されていた日本の使命・補講版」に記載されている。

補足すれば、イエスの言葉がキリスト教会によって、キリスト教会の権威付けのために編集されたのが新約聖書ということが出来る。したがって黙示録を翻訳するためには、キリスト教会によって編集される前のイエスキリストの原語が必要なのだ。それこそが1945年に発見された「トマスによる福音書」である。二つ目のヒント、黙示録を翻訳するための「辞書」をあなたは手にした。では三つ目のヒント、黙示録の背景を総括した「歴史書」を手に入れよう。

本来黙示録は聖書の完結編なので、聖書全巻を読み通しその内容を理解しなければ黙示録の秘密にたどりつけない。今から始めて軽く数十年はかかるだろうし、数十年聖書を読み続けたからと言ってその内容を正しく理解できる保証はどこにもない。

けれど、とても簡単な方法がある。「旧約聖書に預言されていた日本の使命」を読めば大筋を理解できるのだ。三つめのヒントである。

以上で「ヨハネの黙示録入門編」を終える。

現時点から二週間もないのですね。もしも2015年5月24日に「印」があったならば、続編である「ヨハネの黙示録・完結編」を2015年7月末までには書き上げ、公開する予定である。その場合、「旧約聖書に預言されていた日本の使命」・「旧約聖書に預言されていた日本の使命・補講版」・「天井裏のイエスキリスト」および「ヨハネの黙示録入門」を読者の方がすべて読み終わっているとの前提で「ヨハネの黙示録・完結編」を書きますので、読んでおいてください。

「印」がなかった場合でも、せめて「旧約聖書に預言されていた日本の使命」だけは読んでください。あなたに天変地異が襲ってきても、未来に希望を持てたならば、あなたが望む世界に行けますから。

では、私をこれまで導いてくださった聖霊に感謝して筆を置きます。

ヨハネの黙示録入門

<http://p.booklog.jp/book/96694>

著者：足利学校

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asikagagakou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/96694>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/96694>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ